

五藤隆一郎氏を偲んで

北村正利

昨年12月19日、日本天文学会賛助会員の五藤光学研究所会長五藤隆一郎氏が66歳という若さで亡くなりました。今年の2月10日に「お別れの会」が赤坂の東京全日空ホテルで行われ、天文台、科学館、博物館の天文関係者など大勢の方々が参会され、故人との別れを惜しまれました。五藤氏はもともと高知県の出身で、五藤光学創業者の斉三氏のあとを継ぎ、昭和54年社長、平成15年に会長に就任されました。その間、プラネタリウム、中口径の天体望遠鏡、各種付属機器の製作で成功され、国内外の天文普及に貢献されました。

隆一郎氏は、昭和39年に日本大学工学部を卒業され、理科系の知識も豊富にもたれ、五藤光学勤務中には自ら新製品の開発を組織的に行うというものづくりにも参加され、従業員150名の天文機器製作専門の近代的な会社に成長させました。昭和59年に開発された4軸制御の宇宙型プラネタリウムは、独特な方法で宇宙劇場ブーム招来の第一歩となり、国内外への大きな影響をもたらしました。その功績により、隆一郎氏は平成5年に科学技術長官賞を、平成6年には黄綬褒章を受けておられます。

天体望遠鏡の分野で特筆すべきことは、日本ODAの文化無償供与による発展途上国の大学、



科学技術庁長官賞の受賞（平成5年）

研究所への多くの反射望遠鏡供与に参画し、国連の宇宙平和利用委員会（本部ウイーン）からの感謝の対象にも入っているのです。例えば南半球のパラグアイのアスンシオン天文台、赤道帯のインドネシアのレンバン天文台、スリランカの近代技術研究所内にある天文研究所などは、いずれも五藤光学製の45cm CCD反射望遠鏡によって、新しい観測結果を次々に発表しております。同じような発展途上国は毎年増えているのが現状であることを見るとき、五藤隆一郎氏が優れた天文機器提供を通して、世界の天文学発展と普及に貢献された功績は非常に大きいものがあります。

心からご冥福をお祈りいたします。

（国立天文台）



ハッ岳五藤光学天文台の開所式に際して、左より五藤隆一郎氏、故 斉三氏夫人、筆者（昭和62年）